

日本人の子どもたちとの人間関係が学校現場で深刻な問題となっていることが報道された。しかし、そのための人員配置や教育方法といった物理的・技術的な問題以前に、「外国人」に対して日本の公教育がいかなる能力を保障するのかということや、文化的な多元性を、文化的に一律であることを特徴とする日本の学校教育の中でどのように実現するのかということが、より深刻な問題となろう。このことは、移民サイクルの中でニューカマー層の定住化や第二世代問題は必至であり、長期的に見て社会的統合ということが焦点化されざるを得ないとする氏の鋭い指摘の通りである。しかし、日本の

文化のありように即して「社会的統合」やその障害となるものの具体的なイメージが読者に伝わってこないのは、日本語の問題を始め、社会的統合に関わってドミナントな日本人との間にすでに幾多の文化摩擦を経験してきた「在日」や「アイヌ」の問題や、戦前・戦後を通じてかなり長い期間にわたって一般水準よりもはるかに高い不就学率を抱えるなど、極めて不平等な教育機会の中を生きてきた被差別部落民などの具体的な検討に欠けていることが一因となっているように思われるのである。

◆四六判 258頁, 2500円
明石書店

◆ REPLY ◆

書評へのリプライ——

お茶の水女子大学 宮島 喬

拙著『外国人労働者と日本社会』が本誌の書評に取り上げられたことに、びっくりしている。学会誌が取り上げて書評の対象とするような本だなどと思わなかったのが戸惑っているのが正直なところである。

本書は、時事的な問題に関わっており、多少論証が不十分でも、議論のキメが荒くても、とにかく公刊しなければならないという義務感のようなものからとりまとめられたものである。いわゆるアカデミックな仕事とは考えていない。想定した読者も、社会学研究者ではなく、労働問題やマイノリティ問題に関心をい

だくより広い範囲の研究者や学生、それに特に国、自治体の政策担当者、ボランティアなどであった。この点が、本書の性格をノン・アカデミックなものに限界づけているのは否めない。社会学的な視点や方法を明示化するという努力も特になかったので、評者鍋島氏の指摘ももっともであり、その批判も甘受するものである。

まず、本書の各章の論旨を正確に読みとり、紹介して下さった鍋島氏に心から感謝したい。拙い仕事にもかかわらずこのように丁寧にレビューして下さる方を得て、私は幸せに感じている。その適

切な紹介の上で、氏が問題点として指摘されたのは二点にわたっていると思う。

一つは、本書が「一般労働者としての外国人労働者の受け入れ」という結論を言うのに急で、外国人労働者との関連で日本社会の構造と機能実態——参加、統合、利益配分などにかかわる——をどう捉えるかという枠組みを示し、正面から論じるべきところ、はなはだ不十分に終わっているという点である。これは、私としても同意せざるをえない。論文集というものに限界もあったが、外国人の受け入れの場であるわが国の労働市場の特徴、職場のヒエラルキー、地域社会の構造などをもっと明示的に分析の対象とすべきだったかもしれない。ただ、こうした日本社会のありようを、文化のレベルで読み取り、論じることには、かなり意を用いたつもりである。その点の読み取りと、その点に即したコメント、あるいは批判をいただくことを念じている。

今一つの点は、日本の文化のありようや社会統合のあり方について本書が具体的なイメージを与えていず、その一因は「在日」や「アイヌ」や被差別部落民などの過去から現在にわたる問題状況の検討がなおざりにされている点にある、という批判である。このこと自体には私としても反論することは何もない。日本社会という同じ舞台上に生きるマイノリティとして、出自、法的地位、エスニック特性の違いはあれ、かれらがある面で共通の社会的地位を押しつけられていることは否定できない。このなかから

ニューカマー外国人だけを切り離してその状況や不平等の問題を論じることに限界があることについてはまったく同感である。そして、これらの問題についての私の研究の蓄積が十分ではないことも認めなければならない。

ただ、私としては、氏の強調されるものとは異なる今一つの視野における考察をむしろ重視してきたことを付けくわえたい。それは、同時代的な西欧先進諸国の外国人労働者や難民の状況との比較の作業であって、これもまた日本のマイノリティの文化や教育のありようを理解する重要な道と考える。たとえば西欧のマグレブ移民やトルコ移民の子弟の就学問題を知ることは、日本の外国人やその他マイノリティの出会っている問題を理解する上で示唆を与える。わが国の歴史に根ざした相対的に固有の問題状況との関連で現代の不平等や差別の理解に接近することと、他の諸社会とのヨコの比較のなかでその理解を深めることが、相補的な関係にあることは異論のないところだろう。

最後に、書評の労をとって下さった鍋島氏に感謝しつつ、一つだけお願いしたいのは、「宮島喬という日本の社会学のオーソリティ」などという表現は控えていただきたいことである。私自身は一介の未熟な社会学徒であり、それ以外の何者でもないと意識している。これは、儀礼ぬき、余計な修飾ぬきで率直に発言が行われるべき学術雑誌の書評の場にはふさわしくない言葉ではなかろうか。